

# 初級日本語における副詞指導法の一考察

— 「たぶん」と「きっと」を中心に —

許燕(きょえん)<sup>1</sup>・仲瀬志保美<sup>2</sup>・湯ノ口典子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>桜美林大学リベラルアーツ学群・<sup>2</sup>桜美林大学留学生別科

A Study of Teaching Adverbs in Elementary Japanese  
-Focusing on "tabun" and "kitto"-

XU Yan<sup>1</sup>, NAKASE Shihomi<sup>2</sup>, YUNOKUCHI Noriko<sup>2</sup>

<sup>1</sup>College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

<sup>2</sup>Extension for International Students, J. F. Oberlin University

キーワード：推量、推測、確信、確率、意志、確認

## 1. はじめに

本稿は、初級レベルの日本語学習者を対象にした副詞の指導法の改善を試みる研究の一環である。日本語学習者にとって副詞は、非常に難度の高い学習項目の一つであると言えよう。とりわけ、学習者のレベルが初級の場合、一層困難を極めているのではなかろうか。しかし、日本語の各習得段階において副詞はさほど重要視されておらず、その結果、レベルが上がるにつれて教師と学習者の双方から「副詞ができない」「副詞は難しい」という声をしばしば耳にする。

本稿では、初級日本語の教材に出現する副詞の中から、使い分けが難しいと思われるものに着目してその意味と用法を考察する。ここでは、初級レベルの日本語学習者の副詞学習の一助となるべく、「たぶん」と「きっと」(『みんなの日本語初級I第2版本冊』第21課)を中心に、その指導法を検討する。

日本語教育の現場では、副教材の種類が豊富であるなどの理由から『みんなの日本語第2版本冊(初級I・II)』が最も広く使用されていると思われる。また利用にあたり、多くの日本語教師が教え方の手引きとして用いるのが有馬(1994)『日本語の教え方の秘訣』である。次の表1は、当該書による「たぶん」と「きっと」の解説である。

表1 「たぶん」と「きっと」の相違点

副詞	たぶん	きっと
説明	80%～90%の可能性	95%～99%の可能性
例文	あの人はたぶん来ると思います。	あの人はきっと来ると思います。
その他	否定文には「たぶん」のほうがよく使われる。例:あの人はたぶん来ませんよ。	

(有馬 (1994)『日本語の教え方の秘訣』〈下〉[2015:p.200]、表は筆者)

上記の表のように、出来事の実現の可能性を数値で示しているため、一見分かりやすいという印象を受ける。しかし、「たぶん」を「80%～90%の可能性」、「きっと」を「95%～99%の可能性」であると教えられて、果たして学習者はその使い分けができるようになるのだろうか。さらに、ここに取り上げている例文は両副詞の使い分けを判断する根拠などが示されておらず、文脈からも読み取ることのできない不適切な用例であると考えられる。本稿の出発点はここにある。むしろ、初級レベルの学習者向けに副詞の相違点を説明するのが極めて困難であることは、教育の現場に身をおく者として筆者も十分理解している。とは言え、応用につながらないインプットには異議を唱えざるを得ない。

以下では、2節で先行研究を批判的に記述し、3節で研究対象と調査方法、4節で考察、5節で初級教材における練習問題とその分析、6節でまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 辞書・辞典における記述

本稿は、研究対象である「たぶん」と「きっと」の意味と用法を考察するにあたり、はじめに辞書・辞典における記述を検討する。本節では、学習者が未習語を調べる際に比較的使用頻度の高い『デジタル大辞泉』、および副詞の専門辞書である『現代副詞用法辞典新装版』における記述を用いる。なお、辞書の引用において、例文における「たぶん」と「きっと」を\_\_\_\_で示す。

ではまず、『デジタル大辞泉』における記述を見てみよう。以下のとおり、ここでは「たぶん」が「推量」を表し、「きっと」が「話し手の決意や確信、または強い要望」を表すと記されている。「きっと」のほうが「実現の確かさが強い」としている点は、有馬 (1994)の説明と共通していると言えよう。

#### ■ 『デジタル大辞泉<第二版>』

##### たぶん☐ (副)

ある事柄についての推量を表す。たいてい。おそらく。「一雨だろう」「一大丈夫だと思う」

(用法) ◇類似の語に「きっと」がある。口頭語で、「Aチームがきっと優勝するだろう」のように、「多分」や「おそらく」と同様に用いるが、「きっと」の方が実現の確かさが強い。

きっと (副)

話し手の決意や確信、また強い要望などを表す。確かに。必ず。「明日は一雨だろう」「一來てくださいね」

(本稿に関わりのある個所のみ転載、下線・網掛けは筆者)

また、次の『現代副詞用法辞典新装版』では、「きっと」の意味を大きく「確信」と「例外がない様子」の二つに分類している。その一つ目の意味である「確信」について、主体に着目して以下のように詳述している(まとめは筆者)。

(ア) 主体が第三者や物事の場合：話者が確信を持って推量する様子を表す

(イ) 主体が相手の場合：相手に強く要望している意味を表す

(ウ) 主体が話者の場合：話者の強い決意を表す

一方、もう一つの「例外がない様子」については、「常にある事態が起こる」ことに対する「確信」であると述べている。

■ 『現代副詞用法辞典 新装版』

たぶん (3) ←研究対象の意味のみ

可能性が高いことを推量する様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられる。しばしば推量の表現を伴う。好ましい事柄についても(②)、好ましくない事柄についても(③)用いられる。ただし、話者の主観に基づく可能性の推量を表し、客観的な根拠は暗示されない。また、実現の可能性はそれほど高くなく、結果については特別な感情を暗示しない。

①来るなどと言っても彼はたぶん来るだろう。／②英語がいちばんできるのはたぶん藤井さんだ。

③「パパ、今日も遅いの?」「たぶんね」

「きっと」は話者が実現の可能性について確信をもっている様子を暗示する。

明日は多分雪だろう。(そんな気がする)／明日はきっと雪だろう。(だいたい冷え込むから)

(本稿の研究対象に関わりのある個所のみ転載、下線・網掛けは筆者 pp.276-277)

きっと

(1) 確信を持っている様子を表す。ややプラスイメージの語。述語にかかる修飾語で用いられるが、④のように述語部分を省略することもある。この確信はかなり主観的で、客観的な根拠は暗示されないことが多い。主体が第三者や物事の場合(①～③)には、話者が確信を持って推量する様子を表し、しばしば後ろに推量の表現を伴う(②)。

①明日はきっと雨は降らないよ。／②靴がないから、彼はきっと帰ったのだろう。

③(失恋した友人に)いつかきっといい人が見つかるよ。

主体が相手の場合(④⑤)は、相手の行為について話者が強い信頼を持っていることを暗示し、結果的に相手に強く要望している意味になる。主体が話者の場合(⑥)は、自分の行為を確信している意味になり、結果として話者の強い決意を表す。

④「明日、君の所へ行くよ」「きっとね」／⑤この仕事は明日までにきっとしあげといてくれ。

⑥お金は期限までにきっとお返します。

(1)の「きっと」は「かならず」によく似ているが、「かならず」を表す確信には客観的な根拠と法

則性の暗示があり、打消しの内容についてはふつう用いない。(×)明日は必ず雨は降らないよ。

(2) 例外がない様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。常にある事態が起こることについて確信がもてるというニュアンスである。ただし確信の程度はそれほど強くなく、法則性の暗示はないので、客観的に常にそのような事態になるという保証はないことが多い。

①あいつ、酒を飲めばきっと飲み屋で寝るんだから。

②彼がホームランを打つとチームはきっと勝つ。

(本稿の研究対象に関わりのある個所のみ転載、下線・網掛けは筆者 pp.131-132)

しかし、工藤(1982)では、上述したような「常にある事態」を「習慣的・反復的な事態」とし、発生頻度との関わりから「確信」ではなく「確率」と命名し分析を行っている(工藤(1982)再録[2016:p.32])。これは、『現代副詞用法辞典新装版』で例示している「あいつ、酒を飲めばきっと飲み屋で寝るんだから。」の「酒を飲めば」や、「彼がホームランを打つとチームはきっと勝つ。」の「ホームランを打つと」からも容易に見て取れる。

したがって、本稿では工藤(1982)と同一の立場に立ち、「常にある事態」や「習慣的・反復的な事態」は「確率」と見なし考察を行うこととする。

## 2.2 先行研究と本稿の立場

先行研究において、本稿の研究対象に最も密接に関係しているのが工藤(1982)である。工藤は、「叙法副詞代表例一覧」において、「B現実認識的な叙法」の下位区分に「a)基本叙法」を設け、本稿の研究対象を「7)確信—きっと」、「8)推測—多分」と分類している。また、「きまって、かならず、きっと」は「b)擬似叙法」の「12)習慣・確率」にも入れて分類しており、その多義性を示唆している(工藤(1982)再録[2016:pp.12-13])。

また、「たぶん」や「きっと」のような「推量的な副詞群」を下記の4つに分類し、「この四種の相互関係」は「いわゆる連続的な関係」であると指摘している。その一つが「対象面から言えば事態実現の確実さ(蓋然性)が、作用面から言えば話し手の確信の度合いが、①から④の方向で低くなっていく」ことであると説明している。

①確信：きっと かならず ぜったい(に)

②推測：おそらく たぶん さぞ おおかた etc.

③推定：どうやら どうも よほど

④不確定：あるいは もしかすれば ひよっとしたら etc.

(工藤(1982)再録[2016:p.27]、下線は筆者)

なお、ここで言う推量の一つである①の「確信」は、「もちろん」の類に代表される「断定(あるいは確定)」とは区別して述べるとしている(工藤(1982)再録[2016:p.29])。本稿では、研究対象の考察において上記の四種の分類に従い、「たぶん」と「きっと」の基本的用法をそれぞれ「推測」と「確信」とし分析を進める。

### 3. 研究対象と調査方法

本稿では、コーパスの実例に基づき実証研究を行う。データ収集においては、幅広いジャンルが見られる『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の「ベストセラー」に絞ってデータを採集した。

表2 全用例分布

副詞	たぶん	きっと
全用例数	358	436
翻訳作品	64	96
その他対象外	19	19
研究対象	275	321

詳しくは、それぞれの検索キーを語彙素「多分」と「急度<sup>1</sup>」に設定して検索を実施した。左記の表2は、研究対象の全用例の分布表である。なお、本稿では「翻訳作品」、および、数量・金額の多いことを表す「多分に」「多分の」などの名詞やナ形容詞、表情や態度などが厳しいさまを表す「きっと<sup>2</sup>にらむ」や行動・状態にゆるみのないさまを表す「帯をきっと<sup>3</sup>固く締め直す」などは「その他対象外」とし、除外する。

他に複数の初級教材における練習問題も分析対象として取り上げる（詳述は5節）。

本稿では、「たぶん」と「きっと」の使用例における共起形式を考察することによって、それぞれの用法の構文構造におけるパターンを取り出す。同時に、構造パターンの考察を通して、より学習者の理解を促す指導法を試みる。なお、本稿では「たぶん」と「きっと」の表記において、実例を除き上記のとおりひらがな表記に統一する。

また、「たぶん」と「きっと」の共起形式の分類は、寺村（1984）の「第6章概言の文と説明の文—二次的ムードの助動詞」（pp.217-311）や、工藤（1989）の「叙述文の述語の叙法性」（工藤（1989）再録〔2016：pp.239-241〕）を参考に行った。

次の表3は、研究対象の全用例における共起形式の分布表である。当該表からも分かるように、「たぶん」と「きっと」の共起形式には共通のものが多く、単純な形式をもってその使い分けを判断するのは明らかに困難である。

表3 全用例における共起形式の分布

共起形式	たぶん	きっと	共起形式	たぶん	きっと
(な) (の) だろう	120	100	(な) (の) かもしれない	4	2
(な) (の) だ	57	72	(イ/ナ) 形容詞φ	5	4
動詞φ	57	72	省略	5	7
(の) ではないか	12	4	まい	1	1
ではないかしら	5		て (動詞のテ形)		2
のではないだろうか	2	1	てくれ		1
のではない (の) かな	2		てはいけない		1
のではあるまいか	1		うよう		1
か	2		と思う		1
はずだ	8	12	べきだ		1
に違いない	5	20			
に決まっている	1	2			

ただし、この共起形式が一つの手掛かりになっているのは事実である。そこで、本稿は上記の共起形式並びに文のタイプに注目して、「たぶん」と「きっと」の用法を次の表4のとおり分類する。また、同一の共起形式であっても用法が異なっている点を考慮し、ここでは共起形式は示さず後に使用例を通して詳細に考察する。

表4 「たぶん」と「きっと」の各用法分布

用法	推測	確信	意志	命令/依頼	確率	確認	総計
たぶん	275	—	—	—	—	—	275
きっと	—	302	10	5	3	1	321

なお、本稿は用例分析において「たぶん」と「きっと」を\_\_\_\_、その共起形式を~~~~で示す。

## 4. 考察

### 4.1 「たぶん」の意味と用法

本稿におけるデータの分析においても、工藤 (1982) の指摘どおり、「たぶん」の用法が<推測>に当てはまることが明らかになった。

用例 (1) のような「(の) だろう」といった推量表現のみならず、(2) (3) の「のだ」や「はずだ」のような説明の叙法を伴う例、(4) の「に違いない」という確信度を表す表現まで、「話し手の推測」を表しているのである。

- (1) 唇をまっすぐに結び、じっと私の方を見ている。たぶん同意を求めているのだろう。「もちろんです」と私は言った。「かなり酔っておられたんでしょうね」「意識がなくなるほど酔っていたようです」(村上春樹『東京奇譚集』)
- (2) 「鳥口君。益田君。そして青木君一今、僕達の周辺ではあるゲームが行われている。それは水面下で非常に長い年月をかけ、緩慢且つ着実に進められていたものだ。それが行われていることに気づく者が居るとしたら多分それは、日本中で僕ひとりだけなんだ。僕は勿論そんなものに関わる気はない。それどころか忘れていた。本気にしていなかった。ところが—」中禅寺は鳥口を見た。(京極夏彦『塗仏の宴』)
- (3) 当然一、二塁セーフ。二塁封殺間違いなしというバントのときにもヤケクソで、「セカンド！」と怒鳴ったことがあった。これもタイミングよくキャッチャーの指示と重なった。たぶん、投手の耳には「セカセカンド！」とダブって聞こえたはずだ。音声多重放送というヤツ。おかげで、投手はあせった。ふりむく動作と球を拾う動作が、手順前後しちゃった。(江本孟紀『プロ野球を10倍楽しく見る方法』)
- (4) いわば、親としての役割を取り戻した、とでも言おうか。—私の好物を作って運んで来たりすることが、楽しそうだったのだ。たぶん、梶川も、私の事故で、こりて、しばらくは母とも会っていないに違いなかった。だから、私がかげがをしたことで、たとえ一時的にしろ、母は、元通りの母に立ち戻ったのだ。(赤川次郎『早春物語』)

また、(5) のように「(の) ではないか」といった形式上の疑問の場合でも、「たぶん」と共起することにより「<と思う>を従わせ<推測>の用法になることが明らかになった。

- (5) そういった社員に私はこう言うことにしている。「株式評論家といっしょやな」と。たぶん一万五千円を切るんじゃないかと思ってたら、やっぱり切りましたか」「一ドルが百十円になると思ってたんですが、やっぱりなりましたか」—。結果が出たあとで「じつを言うとも」としゃしゃり出るのは、恥をかくだけである。(堀場雅夫『仕事ができる人できない人』)

一方で、用例の (1) ~ (5) を概観して分かるように、実現の可能性における話者の心的態度 (感情・気持ち) を伴う表現は見られなかった。

文のタイプにおいても、命令・依頼や意志・勧誘、疑問・確認になることなく、全用例が叙述を表していることが考察できた。このような特徴は、上記の実例のみならず以下の

(6) ~ (8) の作例からも明確に表れている。

- (6) \*たぶん会いに来て。(命令・依頼)
- (7) \*たぶん会いに行こう。(意志・勧誘)
- (8) \*たぶん会いに行く？(疑問・確認)

以上を踏まえ、ここでは「たぶん」の構造パターンを次のように示しておく。

構造パターン：<推測> 主体（≒動作主）：第三者や物事

【たぶん～動詞・名詞・(イ/ナ) 形容詞+推量・確信度の表現/無標形式】叙述  
意味：話者が主観に基づく可能性を推測すると同時に、結果に特別な感情を示さない。

## 4.2 「きっと」の意味と用法

本節では、第3節の表4で示したとおり、「きっと」の各用法について実例を挙げつつ考察を深めていく。工藤（1982：p.37）は、「きっと」の用法分析において<確信>、<意志・命令>、<確率>の3分類を設けている。しかし、本稿では主体や文末形式の相違から、<確信>（302例）、<意志>（10例）、<命令・依頼>（5例）、<確率>（3例）、<確認>（1例）の5つの用法に分類し考察する。

### 4.2.1 <確信>の用法

本稿で取り上げたデータでは、「きっと」の場合、<確信>の用法が302例と最も多くこれは全体の94.08%を占めている。この調査結果は、<確信>を「きっと」の基本的用法としている工藤（1982）の主張とも矛盾しておらず、本稿でも同一の立場を取る。

- (9) 死のイメージは、闇だった。あいつは死そのものよりも、闇を怖がった。闇にひとりで残されるような終わり方は、きっと耐えられないだろう。だけど、明神の森でそうだったように、きみに抱きしめてもらえれば、安心できる。看取られるように終わりたいのか。（天童荒太『永遠の仔』）
- (10) 「仕方がない、俺の部屋へ泊れよ」兵頭が云うと、五月女は意地になり、「しかし、ちゃんと予約してOKの返事を取ったんですよ、どうせ、エッソか、BPの連中が横から割り込んで来たのに違くないですよ、こいつ、日本人を舐めている」いきりたつように云い、フロント係に、「もう一度、エコノミータイプの部屋を当ててみてくれ、きっとあるはずだよ」と云い、馴れた手つきでチップを握らせかけると、「われわれの国では、去年の革命以後、正規でない料金を受け取ることは、法で禁じられておりますのでー」チップを押し返した。（山崎豊子『不毛地帯』）
- (11) アメリカ滞在期間は星のほうのがはるかに長いので、彼が教える場合のほうが多い。「この国では、とにかく頑張ることだ。一生懸命やってさえいたら、きっと応援する人が現われる。この国は日本と違って人間はみな自由で生き生きしている」星の意見に、英世は大きくうなづく。（渡辺淳一『遠き落日』）

上記の(9)～(11)の用例を見てみると、点線部分で示しているように話し手の推量には確信の根拠が示されている。例えば、(9)では「あいつは死そのものよりも、闇を怖がった」からこそ「耐えられない」という判断が信憑性を持つようになるのである。同様に、(11)の「この国では、とにかく頑張ればそれは必ず評価されることになり、「応援する人が現われる」ことにつながっていくことが説得力を帯びてくるのだ。また、主体も「あいつ」(9)や「エコノミータイプの部屋」(10)、「応援する人」(11)と、第三者や物事を

示している。

上述のような使用傾向に基づき、本稿では「きっと」の基本的用法である<確信>の構造を次のとおりパターン化する。

構造パターン1：<確信> 主体（≒動作主）：第三者や物事

【きっと～動詞・名詞・(イ/ナ)形容詞+推量・確信度の表現/無標形式】叙述  
意味：話者が確信を持って推量する様子を表す。

#### 4.2.2 <意志>の用法

4.2節の冒頭で言及したが、工藤(1982)では「意志」と「命令」を区別せず<意志・命令>の用法としている。しかし、本稿ではこれに異議を唱え、主体(=動作主)が話し手か相手(聞き手)かによって、<意志>と<命令・依頼>の用法を区別する。本用法には、(12)の「行こう」のように意志表現「う・よう」と共起する用例もあれば、(13)の「治してやる」の「てやる」のように決意や企図を表す表現を伴う用例も見られた。また、(14)の「返す」のような無標の動作動詞が文脈の補助により話し手の意志や聞き手との約束を示している用例も考察できた。

(12) 夜空を仰いでオエツすることしばしであったが、日本は、いや、地球はどうなるのであろうか、といった当初の遠大な理想と気鬱はみじんも現われず、ただただ、己れのふがいなさと女運のなさを嘆くばかりであり、東京に帰ったらきっとトルコ風呂に行こうなどと、目減りの激しい貯金通帳を思い出しつつ、悲愴な決意をするばかりであった。(高橋三千綱『こんな女と暮らしてみたい』)

(13) 「大丈夫だ。前の移植のときもそうだっただろう。すこしの拒絶反応ならすぐにおさまるんだ。きっと治してやる。すぐにおいしいものを家で食べられるようになる」「…」「ところで…」吉住はそこで言葉を切った。少しのあいだ躊躇したが、思い切って尋ねることにした。(瀬名秀明『パラサイト・イヴ』)

(14) 「五十万？」祖父は金額を聞いて目を丸くした。「たのむよ。働いてきっと返すから」「そんな大金、いったいなんに使うんだ」「理由は聞かずに、とにかくお金だけ貸してよ」「そういうわけにいくもんか」(片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』)

このように、<意志>の用法の場合、主体と動作主が同一でありかつ話者であることは明白である。また、共起する品詞においても<確信>の用法とは異なり動詞のみである。加えて、意志表現の「う・よう」を従わせて相手に働きかける勧誘を表そうにも、「きっと」を冠してしまうと話し手の意思表示が優勢になる傾向にあると思われる。次の作例(15)(16)の場合、主体が話し手のみの場合はさほど不自然に感じないが、「相手と一緒に」という働きかけを想定するとにわかにならざるが増してくる。

(15) ? きっと (一緒に) 帰国しよう。

(16) ? (桜子も誘って) きっと ゴッホ展を見に行こう。

これらの特徴をまとめ、ここでは<意志>の用法における構造パターンを以下のように記述する。

構造パターン2：<意志> 主体 (=動作主)：話者の場合

【きつと～動詞+意志表現/無標形式】意志・叙述

意味：話者の強い決意や企図を表す。

#### 4.2.3 <命令・依頼>の用法

本用法は、主体 (=動作主) が相手 (聞き手) になる場合である。<命令・依頼>の用法と名付けているが、採集した用例数に限りがあることもあり、実際ダイレクトに命令形が用いられた用例は (17) の「持ってきてくれ」の1例のみだった。その他に (18) の「いられるようにして」のような「動詞テ形」の出現も見られた。

- (17) 「仕方ないなあ」舌うちの音がはっきりと受話器をとおして聞えてくる。守田はせっかちなことでも有名だった。「じゃ、明日必ず持ってきてくれよ。わかったね。きつとだよ」私の返事もきかず、一方的に電話は切られてしまった。原稿はもう少し先でいいといいながら、自分の欲しいものとなると明日でも私を呼び出したいのだ。(林真理子『最終便に間に合えば』)
- (18) 「今年と一緒にいて欲しいなあ」「そうだな…」風野が曖昧な返事をする、衿子は体をのりだして「じゃあ、ずっと一緒にいてくれるのね」「まだ予定がはっきりしないからさ、もう少し近づいてから決めるよ」せっかくいいムードになっているのに、この雰囲気壊すのは惜しい。「きつと、一緒にいられるようにして。約束よ」衿子はそういうと、さらに風野の盃に酒を注ぎ、自分のにも注いだ。(渡辺淳一『愛のごとく』)
- (19) 「ペロはまだ死んでいるかい」と、のび太は尋ねる。「なにってんの、あんたが生き返らせるんじゃない」と、静香。「きつとなおしてね、約束したでしょ、きつとよ」と、静香。そしてのび太らは、静香の家へと急ぐのだが、門の前までくるとペロが走り出してくる。どうやら、昨晚の薬が効いたようだ。(世田谷ドラえもん研究会『ドラえもんの秘密』)
- (20) 「江戸に着けば、吉田殿と近松殿とにお願いして在府の者に漏れなく報せるように。片岡・磯貝・田中の三人もきつと忘れるではないぞ…」円山会議の結果を持って江戸に向う堀部安兵衛と潮田又之丞に大石が念を押した。(堺屋太一『峠の群像』)

また、(19) は終助詞を伴い「きつとよ」の形を取っているが、前後文脈から判断すると「なおして」にかかる (18) に類似している使用例であると見なされる。さらに、(20) の「忘れるではないぞ」に関しては、「てはいけない」という「禁止の依頼」と解釈しこの用法に分類した。

さらに、主体に関して言及するならば、(17)～(20) のどの用例も相手 (聞き手) であることは明らかである。例えば、(17) は守田→私、(18) は衿子→風野、(19) は静香→のび太、(20) 大石→堀部安兵衛と潮田又之丞である。なお、ここでの「→」は依頼の方向を示す。

以上を踏まえ、「きっと」における〈命令・依頼〉の用法の構造パターンを以下に示す。

構造パターン3: 〈命令・依頼〉 主体 (=動作主): 相手 (聞き手) の場合

【きっと+終助詞/動詞+命令・禁止・依頼表現】命令・依頼

意味: 相手に強く要望していることを表す。

#### 4.2.4 〈確率〉の用法

本稿の調査によると、「きっと」における〈確率〉用法の例は3例と少数だった。ここで言う〈確率〉の用法は、2.1節で規定したとおり、「習慣的・反復的な事態」における使用例を指す。その根拠を、点線部分である(21)の頻度を表す「また」、(22)の「あと百年経っても」や「変わることなく」、(23)「こんなことのあったあとでは」などの表現に見ることができる。また、〈確率〉の用法における「きっと」は、限りなく「決まって」に近い意味合いになると考えられる。

(21) 「気が向いたら折返してくるわ」お菓は、まったくあっけなく、長崎から東京へ引揚げていった。

私は博多まで汽車で送ろうと云ったが、「博多まで送られたりしたら、きっとまた博多でグズ  
つくわ」彼女は福砂屋のカステラを二十三本と、大きな南京餅を二つ抱え、さすがに、シヨン  
ボリと、夜の列車に乗込んだが、(中略)(檀一雄『火宅の人』)

(22) テレビから窓へと目を移すと、眼下にはローマの街がおだやかに広がり、テニス界はナブラチ  
ロワの時代からグラフの時代へと移り変わっても、この街はあと百年経ってもきっと変わるこ  
となく、不思議なほどの重厚感をもちつづけるのだらうなと思わせた。(郷ひろみ『ダディ』)

(23) 彼女はバスタオルで顔の涙を拭い、部屋を出ていった。ドアが閉まり、わたしはもう一度布団  
にくるまって目を閉じた。こんなことのあったあとではきっとうまく眠れないだらうと思った  
のだけれど、実際にはそれからすぐに、不思議なくらいぐっすりと眠り込んでしまった。(村  
上春樹『スポーツニクの恋人』)

本稿では、工藤(1989)でリストアップしているような「しがちだ/しかねない/しや  
すい/しにくい/しないとかがぎらない/することもある」(工藤(1989)再録[2016:  
p.240])といった確率の表現との共起の出現は見られなかったが、上述のとおり〈確率〉  
の用法であると判断できる十分な形式的根拠は得られた。よって、その構造パターンは次  
のように示すことができる。

構造パターン4: 〈確率〉 主体 (=動作主): 第三者や物事

【習慣・反復的表現~きっと~動詞・名詞・(イ/ナ) 形容詞+確率の表現/無標形式】叙述  
意味: 習慣的・反復的な事態の実現頻度における話者の推量を表す。

#### 4.2.5 〈確認〉の用法

〈確認〉の用法は、本稿によるオリジナル分類である。用例数の関係上今回の考察では

1例のみ見られたが、その他の4つの用法とは性質を異にしているため、独立した用法として立てるに値すると判断しここに記述する。

(24) 「金のことは心配なくていいんだ。待たせている友達というのが口うるさいやつでね。今日はこれで帰らなくちゃいけない。また今度、必ず来るから…」 「ホント？ きっと来る？」 スッポンポンの丸裸のままトーセンボの形をしていた赤城はうれしそうに訊き返した。「すぐ、来てね。明日来る？」 (生島治郎『片翼だけの天使』)

本用法の場合、(24)の「来る？」のように疑問文の形式を持って出現すると考えられる。ただし、前後の文脈から判断するに意味的には「来てほしい」という話者の「希望」であることが読み取れる。そのため、「相手に強く要望」することを表す<命令・依頼>の用法から派生してきたものとも考えられる。

むろん、(24)は普通体で親しい間柄でないと使えない用法である。初級レベルの学習者の場合、マス形から学んでいるため「パターン」として導入するには時期尚早と思われる。ここでは上記の4つの構造に倣い、そのパターンのみを次のとおり記述しておく。

構造パターン5：<確認> 主体 (=動作主)：相手の場合

【きっと+動詞+疑問表現】疑問

意味：希望を込め、疑問文の形式で相手に確認する。

## 5. 初級教材における練習問題とその分析

ここまで主として「たぶん」と「きっと」の共起形式に基づく構造パターンを考察してきた。本節では、これに理論的根拠を求め、実際初級の各種教材に取り上げられている練習問題を「構造パターン」という視点から分析する。その目的は、両副詞の使い分けにおけるより効果的な指導法の追究にある。

ここでは、日本語教育の現場における実際の導入状況を把握するために、以下の各種教材における練習問題を収集し分析を行う。

『みんなの日本語初級I・II第2版本冊』『みんなの日本語初級I・II第2版 書いて覚える文型練習帳』『みんなの日本語初級I・II第2版標準問題集』『できる日本語初級』『できる日本語初級わたしの文法ノート』『できる日本語初級わたしのことばノート』『つなぐにほんご初級1・2』

次の練習問題のうち、(25)～(28)は「たぶん」が選択肢に挙がっている問題である。中でも「たぶん」と「きっと」の両副詞とも選択肢になっているのが(25)(26)である。(25)の場合、「たぶん」はすでに例題で使われているため②はさほど難しくないと考えられる。しかし、「よく勉強していましたから」という客観的根拠が示されているとは言え、例題と②は置き換えが可能であろう。

(25) たぶん・きっと・もし・確か

例：あしたは（ たぶん ）晴れるでしょう。

- ① ( ) お金が300万円あったら、新しい車を買いたいです。  
② あの人はよく勉強していましたから、( ) 合格するでしょう。  
③ 林さんの誕生日は( ) 2月29日ですね。

(『みんなの日本語初級Ⅱ第2版 書いて覚える文型練習帳』副詞・副詞的表現のまとめ(32課まで)A、p.47)

(26) 晩ごはんは外で食べますか。…いいえ、( きっと・自分で・たぶん ) 作ってうちで食べます。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版本冊』副詞・接続詞・会話表現のまとめⅡ 1-12)、p.222)

(27) A: 田中さんが会社をやめる話、Cさんも知っていますか。 B: いえ、まだ知らないと思いますよ。

A: そうですね。Dさんは? B: たぶん、Dさんも(知らない) と思いますよ。

(『つなぐにほんご 初級2』L25-2 ㊦④、p.210)

(28) A: (たぶん・もし) よかったら、一緒にフリーマーケットへ行きませんか。

B: いいですね。行きましょう。(『できる日本語 初級 わたしのことばノート』第15課3-①、p.59)

同じく、(27)の「たぶん」も「きっと」に置き換えられる問題である。そういう意味で「きっと」は前後の文脈に頼る面が非常に大きく、文脈を度外視して示すのは困難な副詞であると言えよう。むろん、結果に対する話者の感情の有無という点で差が生じるのも当然の結果である。そのため、このような問題は初級レベルにはふさわしくないと思われる。

一方で、次の(29)～(32)は「たぶん」と「きっと」の使い分けというより、「きっと」と「ぜひ」が選択肢に挙がっている問題である。ここでは文脈に頼ることもできず、(29)～(31)のように「と思います」という表現が<確信>の用法である唯一の根拠になる。また、(32)では「たいです」という「願望・希求」の表現から「ぜひ」にたどり着ける問題であろう。しかし、実際の授業ではこのような共起形式による使い分けは、個々人の教師の判断による導入項目になっている。教師用の教え方の手引きなどの参考書でも、セットで取り上げられていないのが現状である。

(29) ミラーさんは来ますか。…ええ、( きっと・ぜひ・だいたい ) 来ると思います。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版本冊』副詞・接続詞・会話表現のまとめⅡ 1-8)、p.222)

(30) あしたは( ぜひ・きっと ) 雨が降ると思います。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版 書いて覚える文型練習帳』まとめ副詞の整理(21課まで)A-3、p.112)

(31) タワボンさんは( ぜひ・きっと・ずっと ) 大学に入ることができると思います。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版 標準問題集』第21課6-4)、p.48)

(32) (特に・ぜひ・きっと ) また祇園祭に行きたいです。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版 標準問題集』復習18～25課6-5)、p.48)

さらに、(33)～(36)には「確か」や「はっきり」などの副詞が選択肢として頻繁に登場していることが分かる。(34)は「はっきり」が正解になっているが、「彼は今日のことも分かっていない人なので、来週の予定はきっとわかりませんよ。」などと文脈を補えば、必ずしも不正解とは言えないのだろう。

(33) 空がとても暗いですから (きっと・はっきり・確か ) 雨になるでしょう。

(『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』副詞・接続詞・会話表現のまとめ12-2)、p.86)

(34) 来週の予定は(確か・はっきり・きっと)わかりません。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』復習26～33課7-例、p.20)

(35) 林さんに聞いたんですが、ほんとうに会社を辞めるんですか。

…ええ。(きっと・確か・実は)友達とレストランを始めるんです。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』復習26～33課7-18)、p.20)

(36) おとといから(ずっと・きっと・はっきり)雨が降っています。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』復習26～33課7-6)、p.20)

最後に、(37)～(40)まではわずかな表現を手掛かりにして「きっと」を正解から排除しなければならない問題である。例えば、(40)では「でも」がなければ「きっと」を用いても自然な文になると考えられる。つまり、「きっと」が選択肢の一つになっている練習問題はさまざまな様相を呈しているのだ。

(37) 木村さんに会って(直接・特に・きっと)話したいです。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』復習26～33課7-1)、p.20)

(38) (できるだけ・なかなか・きっと)夜遅く電話を(かけない)ようにしてください。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』第36課5-5)、p.26)

(39) (よく・もし・きっと)時間があつたら、遊びに来てください。

(『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 標準問題集』復習18～25課6-10)、p.48)

(40) いい景色ですね。…ええ。でも桜が咲けば(もっと・ずいぶん・きっと)きれいですよ。

(『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』副詞・接続詞・会話表現のまとめ12-11)、p.86)

以上のように、初級レベルの学習者が複数の選択肢の中から「たぶん」や「きっと」を正解あるいは不正解と判断するのは極めて困難であることが明らかになった。その上、「きっと」の場合、その多義性(5つの用法分類)が文意の揺れを招き、指導者側に苦悩を与えているのも事実である。

応用に直結する導入のためには、より適切な練習問題の作成と、各副詞における共起形式や主体および話者にも目を向けることが必要不可欠であろう。ひいては、初級レベルであることを理由に副詞を敬遠することなく、学習者に理解できる効果的な指導法を模索する基本的な姿勢が求められている。

## 6. まとめと今後の課題

本稿は、初級レベルにおける「たぶん」と「きっと」の使い分けを出発点に、さまざまな角度から両副詞の相違点を考察してきた。結果、両副詞の意味と用法について次のとおり構造をパターン化することができた。

**たぶん**

構造パターン：＜推測＞ 主体（≒動作主）：第三者や物事

【たぶん～動詞・名詞・(イ/ナ) 形容詞+推量・確信度の表現/無標形式】 叙述  
意味：話者が主観に基づく可能性を推測すると同時に、結果に特別な感情を示さない。

**きっと**

構造パターン1：＜確信＞ 主体（≒動作主）：第三者や物事

【きっと～動詞・名詞・(イ/ナ) 形容詞+推量・確信度の表現/無標形式】 叙述  
意味：話者が確信を持って推量する様子を表す。

構造パターン2：＜意志＞ 主体（≒動作主）：話者の場合

【きっと～動詞+意志表現/無標形式】 意志・叙述  
意味：話者の強い決意や企図を表す。

構造パターン3：＜命令・依頼＞ 主体（≒動作主）：相手（聞き手）の場合

【きっと+終助詞/動詞+命令・禁止・依頼表現】 命令・依頼  
意味：相手に強く要望していることを表す。

構造パターン4：＜確率＞ 主体（≒動作主）：第三者や物事

【習慣・反復的表現～きっと～動詞・名詞・(イ/ナ) 形容詞+確率の表現/無標形式】 叙述  
意味：習慣的・反復的な事態の実現頻度における話者の推量を表す。

構造パターン5：＜確認＞ 主体（≒動作主）：相手の場合

【きっと+動詞+疑問表現】 疑問  
意味：希望を込め、疑問文の形式で相手に確認する。

また、各種初級教材における両副詞の練習問題の考察を通して、「たぶん」と「きっと」の応用には「ぜひ」や「確か」などの副詞の考察も必要であることが明らかになった。

今後は、稿を改め共通点を持ちながらも使い分けが必要な「きっと」と「ぜひ」、「きっと」と「必ず」や「絶対(に)」も視野に入れ、考察を深めていきたい。

**注**

- 1 「きっと（急度・屹度）」の語彙素は、「急度」である。
- 2 この場合アクセントも頭高型になっており、本稿の研究対象の平板型とは区別される。
- 3 同注2。

**参考文献**

- 工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」国立国語研究所『研究報告集3』〔再録：工藤浩（2016）『副詞と文』ひつじ書房、pp.3-57〕
- 工藤浩（1989）「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39〔再録：工藤

- 浩 (2016) 『副詞と文』 ひつじ書房、pp.227-253]
- 工藤浩 (2005) 「文の機能と叙法性」 『国語と国文学』 82-8 [再録: 工藤浩 (2016) 『副詞と文』 ひつじ書房、pp.255-276]
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版

### 辞書・辞典類

- 飛田良文・浅田秀子 (2018) 『現代副詞用法辞典 新装版』 東京堂出版
- 松村明編 (2012) 『デジタル大辞泉<第二版>』 三省堂 [2001年4月『大辞泉』初版を元に公開 初版: 松村明編(1995)『大辞泉』三省堂] (JapanKnowledge Lib: <https://sslvpn.obirin.ac.jp/lib/display/,DanaInfo=japanknowledge.com,SSL+?lid=2001010378600> 2021/10/10 参照)

### 調査対象教材

- 有馬俊子 (1994) 『日本語の教え方の秘訣』 <下> — 『新日本語の基礎 1』 のくわしい教案と教授法— スリーエーネットワーク [2015年第16刷 200頁] /スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 本冊』 スリーエーネットワーク /スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版標準問題集』 スリーエーネットワーク /スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』 スリーエーネットワーク /スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版標準問題集』 スリーエーネットワーク /スリーエーネットワーク (2011) 『できる日本語 初級』 アルク /スリーエーネットワーク (2011) 『できる日本語 初級 わたしの文法ノート』 凡人社 /スリーエーネットワーク (2012) 『できる日本語 初級 わたしのことばノート』 凡人社 /平井悦子・三輪さち子 (2012) 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版 書いて覚える文型練習帳』 スリーエーネットワーク /平井悦子・三輪さち子 (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 書いて覚える文型練習帳』 スリーエーネットワーク /ヒューマンアカデミー日本語学校 (2017) 『つなぐにほんご 初級1』 アスク /ヒューマンアカデミー日本語学校 (2017) 『つなぐにほんご 初級2』 アスク

### 言語資料一覧

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』 国立国語研究所 (特定目的・ベストセラーコア・非コアを含む) 中納言 2.4.5 データバージョン 2021.03